



第 30 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成11年1月29日

CONTENTS

読書と私	応用生物科学科	武井隆三	(2)
図書館を利用して50年	機能機械学科	三輪 浩	(4)
納涼クイズ ～解答編～			(6)
出題者のコメント	機能機械学科	中沢 賢	(6)
材料・技術そして道具	応用生物科学科	金勝廉介	(8)
「上田周辺観光ガイド」⑥	精密素材工学科	村上 泰	(14)
分館通信 告知板			(15)
分館日誌			(16)
編集後記			(16)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは <http://shinlif1.shinshu-u.ac.jp/online.html> です。

読書と私

応用生物科学科 武井隆三

私は農家に生まれ、機械化がされていないことと戦時中で人手がなかったこともあって、小学生の時から過酷な農作業に従事してきた。多忙の時は自主休校であった。そのためか農業が嫌で嫌で仕方がなかった。しかし、今思い返してみると得た物が大きかったように思う。先ず、基礎体力と忍耐力の養成である。それに売れるような立派な作物を育てるには“人の足音を頻繁に作物に聞かせなさい”と教えられた。いわゆる他者に対する思いやり(惻陰)の心を大切にすることを教えられたことである。それ故、小学校時代には本とあまり関係のない生活を送っていたが本では得難い貴重な体験をしたと思っている。それに戦後、教科書の大部分が墨で塗りつぶされ、読む部分がなく、悲しい思いをしたこともいまだに深く脳裏に刻まれている。中学・高校時代には文学好きの友人の影響を受け、読書したいとの思いが募り、文学書を良く読んだものである。また絵画にも興味があり、特に優雅にして精緻な線で描かれた小林古徑の画には魅せられたものである。そのような時にある先生から、思索を深め、思考能力を高めるには哲学書を読みなさいと薦められ、三木清の「哲学ノート」を手始めとし、西田幾太郎の「善の研究」、カントの「純粹理性批判」などを読んだ。と言うよりは読まされた。しかし、何がなんだか分からなく、自信を喪失したことを記憶している。

後に湯川秀樹博士の著書で幼少の頃に意味も分からないのに漢文の素読をさせられたことが後に大変に役立ったことを知り、意を強くしたものである。わけの分からなかったそれらの本を最近読み返してみると、自分なりに理解ができたような気分になり、不思議な感じがする。経験(体験)の大切さを思い知る。そうとはいえ、個人の経験(体験)には自ずと限界がある。ある作家は「読書は体験を予想する」と述べている。そこで知識・見識(知識+経験)を広げ、創造力・判断力を高めるには読書が最も効果的のように思われる。その場合、専門分野以外(専門書は必然的に読む)の本をできるだけ多く、問題(目的)意識を持って、体系的に読書をする必要があるであろうと狭い自分の体験から思っている。一度読書しただけで分かったように思っても、読み返してみると今まで分からなかったものが分かったり、また違った面が見えるものである。

「学^よびて時に之を習^よう、また説^よばしからずや」(論語)の言葉が痛感させられる。この言葉は「一度学べばそれで分かったような気がするけれど実際には良く分かっていないことのほうが多い。学んだことを復習・練習してこそ、真の意味が分かり、学問の喜びも生まれる」ということらしい。読書もこれと類似していると思う。

読書の楽しみと喜びは、読み終えた時、紙間に指を挿し込んで、目を閉じ、静かに、作者の意図するところを思いやり、自分勝手の瞑想を駆け巡らせるとき「細い蜘蛛の糸で全身が、がんに絡めにされ、その中を熱き思いが突き上げ、精神を豊かにしてくれる」そんな本との出会いにあるのではないのでしょうか。

和辻哲郎の「風土」を読むと、風土は性格や思想などの形成に大きく影響することを教えている。読書も同様な面を持ち合わせているように思える。読書によってはその人の考え方や人格形成に影響を与えるものである。読書とは不思議なものである。

大学時代での思い出はドイツ語の講義で毎回、先生から種々なドイツ人作家の作品の紹介とその特徴及び先生の所見を語って頂き、読書の楽しみが掻き立てられたことである。ドイツ語の和訳は残りの 30～40 分位で先生が行い、学生は自分の訳がそれとどう違うのか対比し、勉強する方法が採られた。予習が必然的に義務付けられたわけである。大学生は自主的・自律的に勉強するものとの信念のなせる技であったかもしれない。専門の講義でも類似の傾向が多かったように思っている。当時は大学内に余裕があり、ゆったりとしていたためか、文化人的な教養を備えた先生が多かったように思う。現在の学部は余りにも研究に目を奪われ、教育面が軽視されているような気がする。学生自身が進んで勉強しようという気分させることが重要であろう。かく言う私自身は、雑談しようにも当時の先生のように、学生を鼓舞させるような話ができない。教養のなさとなさを恥入る。

大学審議会答申において、学生が自ら課題を探求し、広い視野から柔軟にして、総合的判断ができる力、それに高い倫理観、豊かな人間性などの能力を持たせるような教育が要請されている。入学した学生を少しでも幅広い教養と高い専門的能力を兼ね備えた人材として社会に送り出さねばならないことになる。先生自身、幅広い勉強が要請されている。専門馬鹿ではいけない。

若い先生方は大変でしょうが繊維学部が独立行政法人化されずに、何時までも不滅にして、燦然と輝いているよう精一杯の努力を切に願います。

図書館を利用して50年

機能機械学科 三輪 浩

「図書館」を利用し始めてからおよそ50年になる。その間に図書館の数も役割も利用形態も大きく変わってきたが、私にとっては、図書館は資料を調べたり本を借りに行く所であり、そのための図書や資料の整理保管場所というのが、未だに中心的なイメージである。50年を振り返って、今では考えられないような幾つかの体験を思い出してみた。

私に図書館利用を余儀なくさせたのは中学校の社会科の授業であった。戦後直ちにアメリカから持ち込まれた「単元学習」という方式のカリキュラムが各教科に取り入れられて、特に社会科では、単元と呼ばれる大きなテーマの中で、“△△△について調査研究し発表し話し合う”という類の小テーマを数人のグループ毎に分担する形をとった学習が中心であった。この調査研究のために、放課後に東京都内の区立図書館や官庁を回って資料調べをしなければならなかった。

焼け跡に建てたプレハブのような校舎では図書室どころではなかったし、実のところ、戦災を免れた公立図書館も蔵書は古いものばかりなので、民主主義を筆頭とする新しい政治・経済・社会のテーマに応えられる資料など皆無に等しかった。結局、先生に相談して、国際関係なら外務省、交通問題なら警視庁というように、お役所での調査が有効であることがわかってからは、首相官邸をはじめ幾つもの庁舎を訪れた。東京なればこそ可能だったことである。中三時代から何度も行ったのは、日比谷のGHQ(占領軍総司令部)にあったCIE(Civil Information and Education, 民間情報教育局)の図書館で、ここには国内で出版される本が全て集められて、今の国会図書館のような役割があったので、確実に何がしかの収穫が得られる場所であった。

考えてみると、時には自分達も焦点が絞られていないトンチンカンな問題を持ち込んでくる中学生グループに、どこの役所もよく親切に対応してくれたものだと思う。今のように手軽にコピーをとるわけにはいかないので、必要と思われるところを全てノートに書き写すしかない。役に立ちそうな資料を探してくれたり、片隅の机を提供してくれて、退庁時間後も付き合ってくれたり、ずいぶん厚かましい限りだが当人達は一生懸命だった。調べた内容はほとんど記憶にないが、今ならばインターネットで各省庁のホームページにアクセスすれば入手できる程度のものであったろう。この頃の経験は、私にとって社会科の勉強としてよりも、社会勉強やその後の資料探しの要領を学ぶことに大いに役立った。

多くの図書館が開架方式になって、本を管理する場所から読んだり借りたりする場所へと変身して久しい。しかし、当時はもちろんのこと、私の学生時代を通して、閲覧室と書庫とは分かれてい

るのが普通で、例えば物理学教室の図書室も学生の書庫への立入りが許されず、教職員が自由に出入りするのをうらめしく思ったものだった。目的の本が決まっているときはよいのだが、カードを頼りに関係ありそうな書名を探し出して閲覧票に記入してカウンターで依頼することになる。しばらく待って出て来た本が見当違いであれば、さらに何枚かの閲覧票を書き直し、係りの人も何度も書庫との間を往復して、やっと所期の目的を達するというのも珍しいことではなかった。そんな時でも係りの人がイヤな顔をするわけではないにしても、私は大変申し訳ないような気持ちになったものである。これは気軽な利用にはマイナスの効果として働いた。今は廃止されているが、信大の中央図書館では数年前まで入館の際に氏名を書くことになっていて、これすら学生の気軽な出入りの妨げにならないかと気懸かりであった。

開架方式を利用する場合のルールで私が未だになじめないでいるのは、棚から取り出した本は自分で戻さずに脇の台に置いておくことである。アメリカの図書館などではかなり徹底していて、係員が絶えずそれを整理して棚に戻していた。そのくらいのことは自分でとて考えがちだが、間違った場所に戻されるよりはということ、サービス業務に対する基本的な姿勢の違いとも感じた。大分以前のことはあるが、私が滞在したカナダの大学の自然科学系の図書館は、クリスマスの数日を除いて連日24時間、係員を少なくとも一人確保して開館しており、サービス提供を使命とする部門であれば当然という考え方らしい。

私はこれまでに転勤・転居に伴って幾つもの大学・研究所・地域の図書館を利用してきたが、一つの図書館の使い勝手を飲み込むにはある程度の時間を要する。残念ながら私の繊維学部分館利用歴は短く、未だに2階から降りる階段の位置が身体では覚えられず一瞬考えて確認するという有り様である。

これからは、特に新しい情報に対する印刷媒体の役割が減るので、建物としての図書館へ足を運ぶことは少なくなろう。それぞれに地理的歴史的事情を背負っているので一般論では断じられないものの、私の体験と好みからは、大学の図書館は一キャンパスで一つの理工系図書館を持つのが望ましいと考えている。繊維学部分館の場合はキャンパス事情で現在の形が必然的であったと思うが、この原則に適っている。因みに、私の専門の分野では物理学教室を単位として図書室を持っている大学が多く、信大理学部も学科単位で、見直す必要があると感じている。しかし、前任の大阪大学理学部はやや規模の小さいこともあって学部単位の分室で、中央館も目と鼻の先にあったので私は図書館環境には恵まれ満足していた。流れはその方向ではあるが、それでも人類が数百年慣れ親しんできた紙と活字の文化との付き合いはまだ当分断ち切れない。

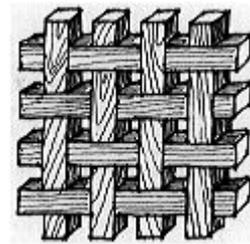
納涼クイズ ～解答編～

(出題：中沢賢・機能機械学科)

お待たせしました！前号に掲載したクイズの答えです。

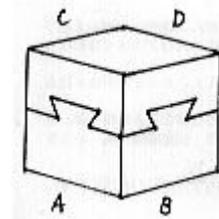
その前に、クイズの内容をおさらいしましょう。

1. 千鳥格子は棧をどういう形に削りどう組み合わせればできるのでしょうか



【1 千鳥格子】

2. 右図のように、A、B、C、D 各面に入り組んだ接触線が現れる組子はできるのでしょうか。できるとすれば、2 個の木片はどのような形につくればよいのでしょうか



【2 四面が入り組むつなぎ】

※ このクイズは「Library」10月号に掲載されました。

出題者からのコメント

図書館の夜間開館の窓口業務をお願いしているパート職員の一人が津田作治さんです。津田さんは長く本学部に勤務され、図書館職員の経験もある図書業務のベテランですが、建具作りでも並外れた腕の持ち主です。そんな津田さんにある宴席で「千鳥格子」や「四方かま継ぎ」など一見組み方のわからない木工細工(「組物」)の話をしました。それから数ヶ月後津田さんがひょっこり訪ねてこられ、「できましたので差し上げます」といながら見事な出来映えの作品を差し出されました。一人で楽しむのはもったいないので、夏休みに、図書館のショーケースにそれを飾りました。その際ただ説明を付けるよりは興味のある人たちにあれこれ考えてもらった方がおもしろいと考え、クイズを付けました。夏休みが終わったとき、応用生物科学科の金勝廉介先生から私の予想を遙かに越えたすば

らしい解答が寄せられているのを知りました。また精密素材工学科2年生の川口知行君からはスチロール材を使って自作した素敵な作品による解答が提出されていました。

さて正解ですが、本誌に掲載した金勝先生の随想をお読みいただき、図書館のショーケースに展示された川口君の作品をご覧になれば、私が改めて解説する必要など全くないことがわかりいただけると思います。ただ、2番目の解答については、作り易さを考えなければ、スライドさせる溝は同心の円弧であれば特に直線である必要がないことだけを申し添えておきます。さらに興味のある方のために参考書を紹介しておきます。

○藤島亥治郎著 本田敏雄撮影「塔」光村推古書院

「組物」の極致は木造の塔に見られる複雑な肘木群で構成された「詰組」です。別所安楽寺の三重の塔のそれは特に見事で、本書に美しい写真が掲載されています。この塔は現存する我が国唯一の八角の塔です。

○上田篤編「五重塔はなぜ倒れないか」新潮社

阪神大地震の際、兵庫県にある15の木造の塔はどれも倒れなかったとのこと。「組物」のエネルギー吸収効果や心柱の動的効果に詳しい。

○相原文哉著「古塔夜話」松崎書店

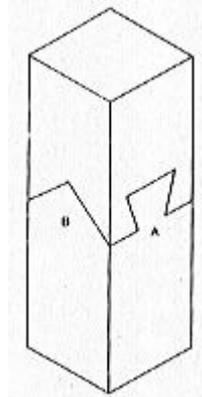
地元の古建築研究家が長野県内の塔などを丹念に調査された貴重なスケッチと資料

○住吉寅七、松井源吾著「木造の継手と仕口」鹿島出版会

内部構造が不明でその解明が公募されたことがある大阪城大手門控柱の継手(図参照→)などが紹介されている。

○ロゲルギスト著「物理の散歩道」岩波書店

この本はシリーズになっているが、その第何集かに「千鳥格子」の解説が載っている。



向かい合う面は互いに同じ継目になっている
大阪城大手門控柱の継手

* * *

正解は次頁、金勝廉介先生(応用生物科学科)の原稿をご覧ください。

図書館のショーケースでも解答を見ることができます。是非、ご覧ください。

* * *

材料・技術そして道具

～「納涼クイズ」によせて～

応用生物科学科 金勝 廉介

この度はとても楽しい納涼クイズをありがとうございました。木というかけがえのない素材を中心に、それを活かす技術を最大限に洗練させた日本人の知恵は 本当に素晴らしいものだと思います。先人の知恵に敬意を表するため、真剣に考えて見ました。

問題文にもありますように、日本の伝統的な建築には釘やカスガイはほとんど使われていませんが、釘を使う習慣が全くなかったというわけではありません。ただ、釘(鉄にしろ竹や木のぎにしろ)を打つと構造としての木の繊維を断ち切ることになり、たしかにその当座は建物が丈夫にできたとしても長い目で見ると釘を使わない建造物に比べて早く傷みが来てしまうのだと思います。つまり少なくとも主要な力のかかる部分には釘を使わなかった建造物の方が結果的に1,000年～2,000年の時間のフィルタをくぐり抜けて来たというのが本当のところなのではないかと思えます。

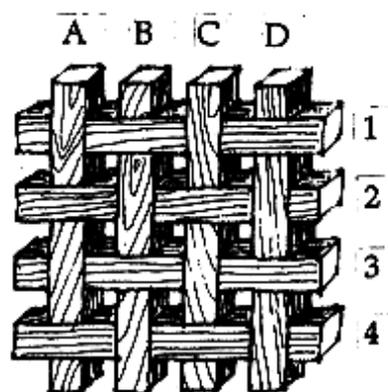
薬師寺西塔を復元した宮大工棟梁の 西岡 常一 氏は、こんな風に言っています。木には第一の生命と第二の生命とがある。とくにヒノキの場合、植物として生存する約1,000年あまりの、いわば第一の生命と、それが切り倒されてから材として生きる第二の生命がその2倍くらい。しかも材となってから最初の300年くらいの中に、その機械的強度はゆっくりと増大さえしてゆくとされている。

そんな氏が薬師寺の西塔を復元するにあたって国からの要望である金属ボルトの使用を、極力少ない数の使用にまで調整をはかった。曰く、ヒノキは2,000年持つ。しかるに鉄はそんなに長い間の年月に耐えられるだろうか。建築に鉄を使うことは、建物の寿命を鉄のそれに妥協させてしまうのだ。そればかりでなく、木が鉄と触れたところは確実に繊維構造が損なわれてしまうのだと(「法隆寺を支えた木」¹⁾)。

氏はまたその中で、大木から切りだした材料はそれが立木だった時と同じ方角に使うべきだという面白い主張もしています。たとえば太いヒノキの丸太を中心から4つに割って4本の柱材を作ったとします。北西の側から取った柱は木目が緻密につんでいて、見た目にもたいへん美しい。それをいわば建物の正面にあたる南側に使いたい気持ちは人情として理解できる。しかし材木は今までと違って強い日射しをはじめとするさまざまな異なる環境条件にさらされることになる。

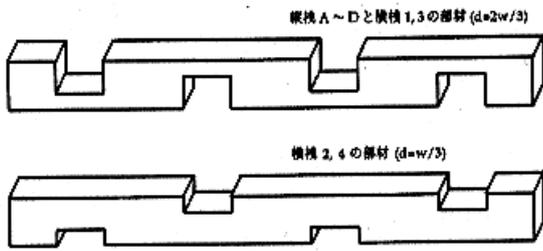
結果として材の狂いやひび割れなど、建物全体の寿命を縮める結果となるのだ。これは逆の場合でも同様で、木目間隔の広い南材(さきの北向き材の「日裏」に対し、これは「日表」と呼ぶのだそうです)を湿気がちの北向きに使えば虫食いなどの被害をすぐに被ることになる……。こんなことは何かそのまま、私たちが任されている学生教育に当てはまりそうな気さえ致し、片時たりとも手を抜いてはいけないと教えられているようです。

なお、上で「丸太を中心から4つに割って」と言ったのは、当時は木材を縦方向に分けるには「切る」のではなく、クサビを打ち込んで「割る(割く)」ことによっていたからです。だからその頃建築材料として使えるのは繊維が素直に走っているヒノキかスギに限られていました。ヒノキでも木目がまっすぐでないものは加工が難しいので、建築に使われるのは素直な木目の良材だけ。今に比べるとはるかにぜいたくな木材利用をしていたそうです。素直でない繊維構造の極めつけは「あて」と言われる部分です。傾斜地から芽生えたヒノキの幼木がはじめのうちは斜めに成長し、そのうち垂直に姿勢を直して成長を続ける。こんな木の根元付近は繊維が極端に曲がっています。ここはクサビによる加工はおろか、機械を使う現代の製材業者でもお手上げだと聞きます。大木の全体重をけなげに支えて来たのに、人に嫌われてしまうというのはなんと気の毒だと思ってあげたのはいかにも 幸田 文 さんらしいところです。工場の人に特に頼み込んで「あて」を持つヒノキの製材を試みてもらったくだりが最後の随筆集「木」²⁾ に書かれています。結果は惨憺たるもので、電動丸のこを使っても切れずにはじかれてしまい、「だから言わないことなかったのに」と技師の人にたしなめられる一幕。ヒノキの材の繊維はそれほど丈夫なのだという一例です。

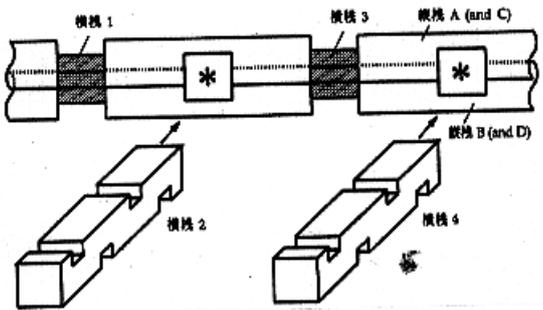


【図1】

さて、最初の問題ですが、これにはある小道具を使うと解決のヒントが容易に見えて来ます。その小道具とは2本の鉛筆です。問題文の図をそのまま活用させていただいて恐縮ですが、今、千鳥格子を形づくる縦横の棧それぞれに便宜上番号をふることにします。縦棧は A ~ D、そして横棧を 1 ~ 4 とします(図1)。そして2番と4番の横棧の上に鉛筆を置いて隠して見て下さい。すると残った1番と3番の横棧に4本の縦棧(A ~ D)をとりあえず組んでやることは簡単ですね。そのあとで、今鉛筆で隠した棧(2番と4番)をはめてやればいいのです。このときにちょっとした工夫が要ります。あらかじめ組んでおく縦棧 A ~ D と横棧 1, 3 の組み手の切り欠きの深さ(d)は、普通の場合のように棧の厚さ(w)の半分にするのではなく、2/3の深さま



【図2】



【図3】

で欠いておきます(図2)。こうした縦横の棧を一杯まで深く組みますと、横棧 2, 4 の入るべきところにちょうど棧一本分が通る隙間ができます(図3: *印)。

すべての偶数番目横棧を通したら、その後縦棧を外にずらすようにして今の横棧 2, 4 の切り欠きと組んであげます。あとはまわりの枠を取り付けてやれば完成です。

ところで、このように後からさし込む横棧 2, 4 の切り欠きの深さは他のものとは反対に、厚さの 1/3 にしておくのが良いようです(図2)。すると縦棧の切り欠きとちょうどの高さで組め、後々組み手がずれる心配が少なくなります。

以上が第1問に対する私なりの答えです。

【図4】

私が韓国・太田市 (Taejon) の研究学園都市に出張した
 って、その研究所の若い人たちと、近くの鷄龍山 (Kyery

5
 夏

に極彩色に装飾した寺院がありました(図4)。後で聞くとそれは東鶴寺 (Tong Hok Sa) という名刹だそうです。その寺の扉がとても印象的だったので写真に残してあります(図5)。

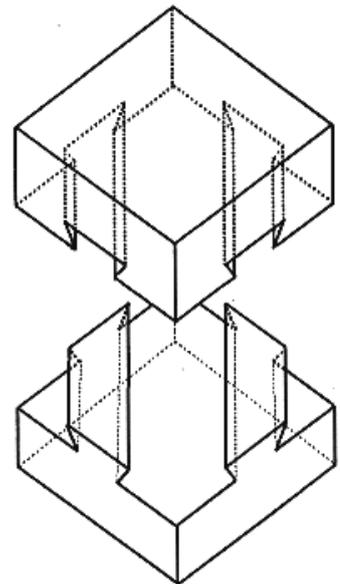
おそらく大きな一枚板を材料にして、それに花の透かし彫りを施したのではないかとと思われる仕上げでした。一輪々々の花に青・赤・黄・白色に丹念に彩色が施され、これもまた丁寧に作っているという点では千鳥格子と優劣つけ難いものを感じました。

次に第2問目です。

正直なところ私にはこの問題の正解はわかりません。強いて答えらしいものとして、下図(図6)のように2本の並行なレール式組み手を持つ構造を、苦し紛れの案として提出させていただきます。しかし本当を言えばこれが正解であって欲しいとは思っていません。なぜなら自分としてはあくまで2本の直行するレールが鮮やかに組みれる仕組みを見て感激したいと願っているからです。それにひきかえ、この回答は、自分が考えたものながら余りにも「肩すかし」的な感じが強いと思っているからです。

大層昔の話になりますが、カッパブックス(光文社)から「頭の強くなる本」(著者の名誉のためにこの本の著者名はあえて忘れてしまったことにおきますが)というパズル本が出版され全国的に大変なベストセラーになりました³⁾。中を開いてみれば何のことはない、人を小バカにしたような肩すかし問題・引っ掛け問題ばかりで、当時中学生だった私でさえ、何とも安直な執筆姿勢だなと思ったものです。

もちろん今回の「納涼クイズ」の出題はそんな不真面目な姿勢で作られたものでないことは当然であり、「頭の強くなる本」を話題に出すこと自体失礼なことであったと思っています。それ故一層のこと、繰り返すようですが、自分としては図6の案が正解であるとは望みたくないのです。



【図6】

* * *

それにしても、出題された問1、問2の問題のエlegantさにはもちろんのことですが、その問題の元となった木工作品を作られた津田さんの仕事の丁寧さ・正確さにもまた、深い感銘を受けました。千鳥格子にしてもブロック組み子にしても、ここまで隙間なく正確に組手を作られるのは、文句なく敬服に値します。

建具やさんが障子の棧を組み立てているのを見ると、組手を組んだあと、その部分に歯ブラシに含ませた水をちよつとつけてやる。それでもうしっかりと組まれて容易にガタの来ない建具の完成だということですが、津田さんのお仕事はそんな建具やさんの鮮やかな手並みを自然に思い起こさせてくれるようです。

それと同時に、直接には見えて来ませんが、想いを馳せたいのが、津田さんの確かな腕を支える優れた道具です。「弘法筆を選ばず」なんてことは絶対にありません。優れた職人さんは既成の道具を自分の仕事にマッチするように改造してあげるのです。つまり優れた職人さんは優れた道具づくり人だとさえ言われます。

ところが皮肉なことに、使いやすい道具・切れ味の良い刃物のように、いわゆる道具としての傑作であればある程、それがお手本として後世に残ることは稀なのだそうです。カンナやノミ、のこぎり等どれも、良く切れる道具は徹底的に使われ、その間繰り返し研いだり目立てをされて、やせ細ってしまってもなおリタイアさせてもらえません。こんなことは「大工道具の歴史」⁴⁾に興味深く書かれています。

さらにこの本には大鋸(おが —— 縦引きのこぎり)の発明とそれによりもたらされた木材加工技術の飛躍的な進歩のいきさつなども紹介されています。

ところで日本の大工さんの使う道具で何が最も優れているかという話題に対して「墨壺」を挙げる人が多いと思います。確かに長い直線を一瞬で正確に引く鮮やかさは文句なく素晴らしいもので、見ているとため息さえ出るような気持ちにさせてくれるものです。それだけでなく、上手な人はこれを使って緩やかな曲線さえも引いてみせます。古建築の屋根の庇のカーブなどはその例で、上で紹介した東鶴寺の庇にも見られます(図4)。墨壺の糸に指で縊りを加えておいて、普段のように真上からではなく、斜めに糸をはじくと緩やかな曲線がかかるのだそうです。

さて私はというと、この墨壺もさることながら、最もシンプルな道具として曲尺(かねじゃく)の重要性を推したいと思います。この道具は要するに直角定規なのですが、正確な垂線を能率良く書くのには、この単純すぎる形態が最良なのです。ただ、その単純な形態と大きさには幾多の経験と工夫がぎっしり凝縮されています。定規の一つの腕には何か間延びしたような物差しの目盛

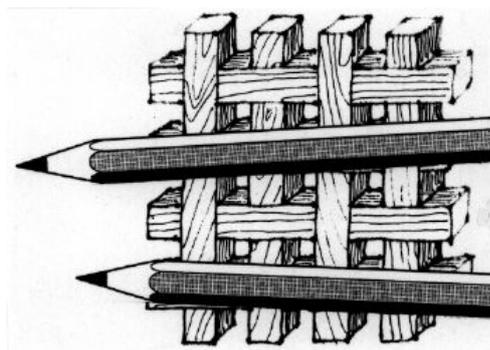
りがきざまれています。これは、通常の物差しを目盛りを $\sqrt{2}$ 倍して目盛ったもので、丸太の直径をこの目盛りで計れば、直ちにこの丸太から作られる角材の一辺が読み取れるしかけになっています。また定規自体の太さ(幅)は柱と長押の組み手を切る際の幅や深さの基準になっています。

面白い使い方としては、大きな円を正確に書くのにこの曲尺が使われます。板の上に、書きたい円の直径に相当する間隔で2本の釘を打ちます。そして……あとは高校の数学を思い起こせば誰でも納得です。

このようにさまざまに工夫された道具を巧みに使って優れた建造物や千鳥格子などに代表される見事な木工芸品が作られてゆくのです。貴い木のいのちを活かしてくれる古来の日本の職人さんたち、そしてその伝統を受け継がれた津田さんの正確なお仕事に改めて敬意を表しつつこの小文を閉じることにします。

【引用図書】

- 1) 西岡 常一・小原 二郎 (1978): 法隆寺を支えた木(NHK ブックス)
- 2) 幸田 文 (1992): 木(新潮社)
- 3) ? ? ? (19??): 頭の強くなる本(カッパブックス)
- 4) 村松貞二郎 (1973): 大工道具の歴史(岩波新書)



おすすめ日帰り温泉

真田温泉 ふれあいさなだ館

営業時間 / 10:00~21:30(受付 20:30)

料金 / 大人 300 円・プール 400 円

泉質 / アルカリ性単純泉

機能 / 神経痛・筋肉痛・消火器病・痔・冷え性

施設 / 内湯・露天(男女各1)・健康湯・気泡湯・打たせ湯

TEL / (0268)72-2500

施設が整い、料金もお得

みずほ温泉 とうぶ湯楽里館

営業時間 / 10:00~21:00

料金 / 大人 500 円

泉質 / 単純泉

機能 / 神経痛・筋肉痛・疲労回復

施設 / 内湯・露天・サウナ・ジャクジー・ハーブ風呂(全て男女各1)

TEL / (0268)63-4126

詳細は、Library no.29 をご覧下さい。

室賀温泉 ささらの湯

営業時間 / 10:00~21:00

料金 / 大人 300 円

泉質 / 単純硫黄泉

機能 / 神経痛・筋肉痛・消火器病・冷え性・皮膚病

施設 / 内湯・露天・サウナ(全て男女各1)

TEL / (0268)31-1126

オープンしたての新しい温泉

布引温泉 御牧乃湯

営業時間 / 10:00~23:00

料金 / 大人(2時間)300 円・(1日)500 円

泉質 / ナトリウム塩化物温泉

機能 / 神経痛・筋肉痛・消火器病・冷え性・皮膚病

施設 / 内湯(男女各2)・露天・打たせ湯・薬用人参風呂(男女各1)

TEL / (0268)67-3467

浅間山麓を一望できる

あさしな温泉 穂の香の湯

営業時間 / 10:00~22:00

料金 / 大人(2時間)300 円

泉質 / 単純泉

機能 / 切り傷・火傷・冷え性・婦人病・消火器病

施設 / 内湯・露天・サウナ(男女各1)

TEL / (0267)58-0033

一度に50人も入れる露天風呂が魅力

八重原温泉 明神館

営業時間 / 10:00~20:45

料金 / 大人 500 円

泉質 / ナトリウム・カルシウム塩化物泉

機能 / 神経痛・筋肉痛・関節痛・疲労回復・婦人病

施設 / 内湯・露天(男女各1)

TEL / (0268)67-0001

露天風呂から眺める浅間連峰の絶景

♪♪♪分館通信♪♪♪

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。

次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ(<http://shinlif1.shinshu-u.ca.jp>)でご案内していますので、そちらをご覧ください。

⇒ 春季休業中の特別貸出について

春季休業に伴い、下記の通り貸出期間を延長します。

貸出開始日	大 学 院 生	平成11年1月11日(月)	10冊以内
	学 部 4 年 生		8冊以内
	学 部 2・3 年 生	平成11年1月27日(水)	3冊以内
	研 究 生・聴 講 生		
返却期限日	平成11年4月8日(木)		

※ 返却期限日は厳守してください。

※ ただし、卒業生は2月26日(金)までの貸出・返却となります。

⇒ 卒業生の皆様へ

この春卒業予定の学部4年生・M2年生・D3年生に対する図書の貸出・返却期限は2月26日(金)までです。必ず期限日までに返却してください。

なお、進学し4月以降も繊維学部^に在籍される方は、図書を借りる時に係員にお申し出下さい。返却期限日を4月8日(木)とします。

今までに借りた図書で返却していない図書がある場合には、図書館入口のブックポストに投函してください。

⇒ 夜間開館の休止について

2月10日(水)～4月7日(水)の春季休業中は、開館時間が短縮されます。

休業中

8:30a.m.～5:00p.m.

業務は通常通り行います。

10/14	第3回紀要委員会	
10/21	第5回図書委員会	
11/13	第4回電子図書館機能検討 WG	出席者－成田委員
11/13	第4回附属図書館運営委員会	出席者－中沢分館長 小西運営委員
12/7	第6回図書委員会	
12/14	第5回電子図書館機能検討 WG(SUNS)	出席者－成田委員
12/14	第5回附属図書館運営委員会 (SUNS)	出席者－中沢分館長 小西運営委員

編集後記

前号に掲載し、大反響だった「納涼クイズ」の答えをとうとう明かすことになりました。皆さん、わかりましたか？このクイズを提供下さった中沢先生、完璧な解答をお寄せ下さった金勝先生、そして見本の模型を造って下さった津田さん、本当にありがとうございました。

また、村上泰先生の上田観光ガイドは残念ながら今号で最終回になってしまいました。たくさんの情報をありがとうございました。新ネタがあがりましたらまたよろしく願います。

次号は4月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思しますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしております。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。